
魔法少女×魔王×妹×ヤンデレ+嫌われ者の俺×魔法少女な俺=全員俺の嫁

僕様ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女×魔王×妹×ヤンデレ＋嫌われ者の俺×魔法少女な俺Ⅱ
全員俺の嫁

【Nコード】

N4923X

【作者名】

僕様ちゃん

【あらすじ】

タイトルが長い？

知るか！！！！

第一話 俺は俺の嫁

「リア充は死ねば良いんじゃないか？」

「それだ!!」

どうも始めまして、

俺、もとい砂糖 鶏木です。

え？

読めない？

しゃーねーな（「」）

サトウ ケイキっつー

スウィーツ（笑）な名前です。

さて、

現在、俺と（数少ない）友人は、学校のトイレの個室で、昼食を食べている。

「でもさあ、実際俺達もリア充だよな？」

「だな。」

俺は昨日ついに嫁の数が三桁に到達した」

「流石だな・・・」

それに何より、リアル女と付き合う意味が分からん」

「全くだ!!」

バタンツ!!!

俺達は同時に個室から出て、教室に向かう。

俺達が廊下を歩くと、

他の生徒が道を開ける。

と言うのも当然といえば当然だ。

俺達は学校内でも有名な人間だからな・・・

俺は入学式早々に

他の新入生に絡んでいた他校の『学校』を壊滅させたし。
かなり重度のオタク。

友人は、

学校一のオタクで変態。

そんな二人が校内を歩いたらそらこうなるわ。

（そんな俺の趣味は、手芸、園芸。今はカーネーションを育てているが、妹用の冬用のセーターを編んでいる）

教室の前に着くと

何故だか中が騒がしい。

人だかりができていて
中に入れない・・・

「どけ」

「ひい!？」

教室到着
着席

「ちょっと君？」

「あぁん!？」

・・・目の前に女神がいた。

亜麻色の髪を背中まで伸ばし、
スラリと長い身長。

柔和そうな顔の中に見え隠れする、鋭い眼光。

生徒会長の、

七丘 命【ナナオカ メイ】さんだった。

「今日の放課後、話があるから屋上に来て」

そう言って生徒会長は、教室から出て行った。

「聞いたか兄弟、俺に春が来た」

「死ね」

放課後

「貴方には今日から魔法少女になってもらうわ!!!」

「はぁ!？」

何だよ!?

告白と思ったら、『自分は痛い子です』ってカミングアウトかよ!?

「貴方には(略)」

「パーデウン!？」

「貴方(略)」

「シャラーループ!!!」

人に物を頼むには、それ相応の態度があるだろう!!!」

「そうね、じゃあ言い方を変えるわ。

『僕と契約して魔法少女になってよ』」

「だが断る!!!」

「何故!？」

「バカか貴様!!!」

「分かった・・・

なってくれたら私の事は好きにしてくれて良いわ!!!」

「乗った!!!」

みんなバカだった。

十分後・・・

生徒会室にて。

「で？　俺は一体何をすれば良い？」

生徒会室には他にも

生徒会メンバーが揃っていた。

副会長・美剣ミツルギ 咲サキ

会計・『只今絶賛募集中？』

書記・井上イノウエ 実マコトこいつだけ男。

聞いた所によると、
全員魔法少女らしい。

「この魔法のステッキを持って呪文を唱えるのよ。
そしたら貴方も魔法使い☆」

そう言って渡された魔法の杖は、

鉄バットだった。

鉄バットだった。

鉄バット・・・

あれ？

「呪文はこうよ、

『キラリン☆ハート？マジカルウィッチ！！

へーんしーん？』よ」

はずッ！！

でもこれも、全て会長の体の自由を手に入れるため．．．！！！！

「．．．キラリン☆ハート？

マジカルウィッチ！！

ヘーんしーん？」

「プププ！！ 本当にやってる．．．」

「畜生ー！ー！！！！ ブッ殺してやるああああ！！！！」

その瞬間！！

金属バットから眩い光が溢れる！！！！

「そう！！！！ それが貴方の返信の呪文よ！！！！」

．．．えー

『ブッ殺してやる』

が返信の呪文の魔法少女って．．．

無いわぁ．．．

次の瞬間、光が俺の体を包み込む！！！！

会「おお．．．」

副「な、何と．．．」

書「す、すごい．．．」

なに！？

俺どうなったの！？

「鏡、見る？」

「・・・な、何じゃコラあああああ！！！！！！！！」

鏡に写った自分の姿は、

切れ長の瞳に、

会長の物よりさらに長い金髪と、
メリハリの効いた体・・・

要するに絶世の美女がいた。

「結婚して下さい！！！！」

即座に鏡に向かって求婚。

「「「うわぁ・・・」」」

周りの連中はドン引きしていた。

かんけーねーけどねー

「自分に求婚するってどうよ・・・？」

「うるせえ！！！！ 俺は俺の嫁だ！！！！」

「言語崩壊！？」

ビービービービー！！！！

突如、生徒会室に警報が鳴り響く!!

副「メイ!! 三丁目に悪魔が現れたようじゃ!!」

会「何ですって!?!」

書「くそっ!! こんな時に・・・!!」

いきなりの急展開に一人置いてきぼりを食らう俺。

「えー、何が起こってるんスカ?」

「悪魔が出たのよ!!」

「だからその悪魔について説明プリーズ」

「敵」

「おk!!!!」

「行くわよ!!!!」

「「了解」」」

気がついたら全員変身していた。

会長は

典型的な白い魔法少女の衣装。

(露出・高)

「ちょいまで、俺どうやって戦えば良いの!?!」

正直、魔法少女なったからと言っても、
全員ここまで飛んで来た訳ではなく走って来ていた。

だから一切魔法の使い方なんて知らんし分からん。

「ああそれなら、
体が強化されてるから殴れば良いわ」

「・・・えー? 魔法とか使えねえの?」

「うん。だからその魔法のステッキ（鉄バット）で殴り殺しなさい」

「メチャクチャ物理的!?!」

「勝てば良いのよ勝てば!?!」

「身も蓋もねえ!?!」

副「はあーーーー!?!」

副会長が魔法のステッキから日本刀を引き抜いた!?!
ヤッパリ物理的だ・・・

ズバババババ!?!

『プギャー!?!!』

ズドーン

・・・ 悪魔、絶命。

「流石は咲ね。あの程度の悪魔なら相手にならないわね」

「ねえ、俺たち要るの？ 本気で」

とその時、

『プギャー！！！！！』

悪魔が突然暴れ出し、
具前近くにいた男に襲いかかった！！！！

「しまった！！！」

男「うわわわわわ！！！！」

「させるかああああ！！！！！！！！！！」

俺は男と触手ちゃん（命名）間に入る。

「おおおおおお！！！！！！！！！！」

触手ちゃんが迫る！！！！

【バッター、振りかぶって・・・】

「打ったああああ！！！！！！！！！！」

カッキーン！！！！！！

キラ☆

「・・・これならメジャーリーグも夢じゃ無いな・・・」

そう言って汗を拭う。

「あああああ！！」

助けて頂いてありがとうございます結婚して下さい！！！！」

「あれ？」

お前、友人じゃねえか？」

「へ？ どこかでお会いしましたか？」

「俺だよ、俺」

「まさか、ケイキ！？」

よく分かったな！？

「まあ良いや、結婚してくれ」

「死ね」

カッキーン！！！！

キラ☆

星になった友人を見送りながら、俺たちは家路についた。

第二話 妹ちゃんと幼馴染（ヤン（前書き））

久しぶりに書いたので大分短いです．．

申し訳ございません．．

第二話 妹ちゃんと幼馴染（ヤン

十分後。

家に着いた時、時計は既に深夜の12時をさしていた。

だが、

だがしかし、

きっと俺の妹は起きている。

「ただいまー」

「やあ、おかえり兄。

お腹が空いたから早速ご飯を作ってくれ」

「うおおおおお！？」

ドアを開けたら、

ツインテールの美少女が玄関で正座していた！！

よく見たら妹だった！！（高1、俺の一個下）

「・・・いつからそうしていた？」

「帰って来てからすぐに」

「何時に帰って来た？」

「4時半、かな？」

「八時間も正座してたのかよ!?! バカだろ!?!」

「兄が帰って来るのが遅かったから・・・」

「・・・サーセン」

即座に土下座。

その直後、

『ぐ』

妹の腹がなった・・・

／／／／／

「あ、そう言や飯食って無かったんだっけ?

俺を待つのが分かるけど、飯くらい出前でも何でも頼めば良かったのに」

補足だが、妹は飯が作れない。

と言うより家事全般ができない。

よって基本的に、

炊事洗濯掃除は全て俺の仕事。

え?

洗濯の時、妹の下着をどうするか?

・・・本人の希望により、一緒に洗濯しております。

「・・・兄はバカか」

いきなり罵られた!!!

「うえ?!」

「・・・私は兄の作った物以外口にする気は無いっていつも言ってるだろ」

「ああーそうだったな。悪い、すぐ作る。
つっても大したモンは作れねーけどな」

「わかった。それまでにお風呂沸かしとく」

「りょーかい」

一時間後

「ああー食ったあ」

「ごちそうさまでした。ねえ兄」

「うん?」

「美味しかったよ」

・・・イヤん可愛い

「それじゃあお風呂『入ろっか』」

「そうだな。そう・・・あれ?」

「どうした兄」

「ん？ 何か今のおかしく無い？」

「気のせいだよ。」

「さあ行こう、既成事実を作り」

「さようなら」

さらに一時間後

「ああー良い湯だったあ」

風呂から出てリビングに戻ると、妹が居なかった。
もう寝たかな？

そう思い、俺も自分の寝室に向かい、ベットに入った。

「・・・何か今日は変な一日だったなあ」

「へえどんな風に？」

「いやーなんか生徒会長に魔法少女になれとか言われちゃってさ・・・」

「その話長い？」

「うーん、ちょっと長いかも」

「じゃあ明日聞くよ。
おやすみなさい、兄」

「ああ、おやすみ・・・」

・・・あれ？

（翌朝）

「おはよう兄」

「うおおおおお！？」

目を覚ますと、真横に妹がいた！！！！

「いきなり人の顔を見て叫ぶのって失礼じゃないかな」

「そうですね！！！！ おはよう」

「うん、おはよう」

そう言って優しく微笑んだ。

「ほら、早く起きないと遅刻」

「うん？もうそんな時間か・・・」

「うん」

「んじゃ、悪いけど今日は昼抜きかな？」

「構わないよ、兄と一緒になら。」

それじゃあ早く着替えて学校行こう?」

シュルリ・・・

「そうだな、って待て待て待て待て! ! ! ! !」

「?」

「だめー! ! ! ! !」

振り向かないで! !

見える! ! ! 見える! ! ! つーか見えてる! ! ! 尻が! ! !」

「大丈夫、見せてるから」

「な・に・が・大・丈・夫?」

「前も見る?」

「出ていけ! ! ! ! !」

それから十分後、

着替え終わって家を出た時。

「おはよう」

「うぎゃあああああ! ! ! ! !」

扉を開けると目の前にサ○コがああああ! ! ! ! !

「? どうしたの、ケイキくん?」

「あああ・・・あ?

ああ何だ、哀^{あい}か・・・

相変わらず不気味だな・・・」

「あれ、そう?

それはそうとして結婚しない?」

「ウンソウダネー」

今日の前に居る女は俺の幼馴染で、墓下 哀と言う。

頭の中がヒナミザワってるいかれ女で、

初めて哀が作った手作り弁当で、

中に入っていた豚生姜焼きに、自分の脇の肉を使うと言う離れ技を
繰り出して来た女だ。

く回想く

『ねえねえケイキくん』

『ん? どうした』

『お弁当作ったから食べて?』

『おおサンキューー

所で腹どうしたんだ?

怪我したのか?』

『ううん、気にしないで』

く完食後く

『どうだった？』

『うん、美味かったけど、何の肉使ったんだ？
何か酸っぱかったぞ』

『あれ？豚肉だよ』

『本当に？』

『うん、とっても美味しい雌豚の肉』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

く回想終了く

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いかん・・・

思い出したら吐き気が・・・

「あれ？どうしたの、顔色悪いよ」

「あぁちよつと昔の事をオロロロロ！……！」
（吐瀉）

「へーそうなんだ。」

あ、これ久しぶりにお弁当作ったんだ。食べてよ」

「イヤだやめて本気勘弁して下さいお願いしますこの通りいやだいやだいやだいやだいやだ死にたく無い死にたく無い死にたく無い死にたく無い！！！！」

「そんなに遠慮しなくて良いよ？」

さあ一杯食べてね。

今お腹の中空っぽでしょ？

「食べないと餓死しちゃうよ。食べてくれるよね、食べなきゃヤダ、食べなさい、食べて、食べてよ、食べろっ……！」

かば（弁当箱を開ける音）

ぐしやり（口にねじ込む音）

「あつががががが！！！！！」

あ
あ
・
・
・

駄目だ、意識が……

五分後

《ガチャ》

「お待たせ、兄。兄？」

「あ、おはよう妹ちゃん」

「あ、哀さん。」

おはようございます」

《ピポパ・・・》

「あれ、なにしてるの？」

「救急車に電話してます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4923x/>

魔法少女×魔王×妹×ヤンデレ+嫌われ者の俺×魔法少女な俺=全員俺の嫁

2011年11月12日06時41分発行